

第二十五回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

劉 岸偉 著『周作人伝—ある知日派文人の精神史』

(2011. 10. 30 ミネルヴァ書房 刊)

劉 岸偉 りゅう がんい／Liu Anwei 1957年4月3日生まれ。北京市出身
比較文学、比較文化史を専門とする。

北京外国語大学卒業後、北京大学大学院東方言語文学系を経て1982年来日。東京大学
大学院総合文化研究科比較文学・比較文化専攻博士課程修了、学術博士。札幌大学助教授
を経て、東京工業大学外国語研究教育センター教授。横浜市在住。

主著に『東洋人の悲哀—周作人と日本』（河出書房新社 1991年、サントリー学芸
賞）、『明末の文人—李卓吾』（中央公論社 1994年）、『小泉八雲と近代中国』
（岩波書店 2004年、第四回島田謹二記念学藝賞）執筆分担著に、『世界の中のラフ
カディオ・ハーン』（河出書房新社 1994年）、『翻訳と日本文化』（山川出版社 2
000年）、『江戸の文事』（ペリかん社 2000年）、『日本を問い続けて』（岩波書
店 2004年）などがある。

受賞のことば

一九八九年の秋、博士論文の公開審査も終わり、帰国に備えて将来の研究資料をなるべく多く集めようと、私は神保町の古本屋街にやってきた。二、三軒回ったところ、ある店頭
に並べた岩波書店版『和辻哲郎全集』に目がとまった。決して安くはなかったが、奮発
してそれを買うことにした。購入を決めるきっかけとえば、むろん周作人とも関わって
いる。彼は「日本の人情美」というエッセイにおいて、日本の国民性の長所は「忠孝」に
ではなく、むしろその反対の方向、つまり和辻哲郎が『日本古代文化』の中で指摘した
「湿やかな心情」——人情の美しさにあると述べている。「古事記」の芸術的価値を論じ
た和辻の言葉は、私には作家の息吹を感じさせる、とても個性的、印象的なものであった。
全集を買おうとしたのは、他の名作『古寺巡礼』や『風土』などもまとめて読みたかった
からである。あれから二十数年後、中国屈指の知日家周作人の生涯を描いた拙著が和辻賞
に選ばれたことに、大変光栄に思うとともに、あらためてある運命的な巡り会いを感じて
いる。

安住恭子 著『『草枕』の那美と辛亥革命』

(2012. 4. 15 白水社 刊)

安住恭子 あずみ きょうこ 1948年8月28日生まれ。宮城県亶理郡亶理町出身。
演劇評論を専門とする。

宮城教育大学卒業。出版社勤務を経て、1979年中部読売新聞社（現読売新聞中部支
社）に入社。社会部芸能担当記者として、演劇、映画、音楽、テレビ等芸能全般の取材に

当たり、演劇・映画の評論も行う。記者時代から雑誌「新劇」「演劇界」などに演劇評を執筆。1999年に退社。以後、中日新聞、毎日新聞、「演劇界」「げき」「シアターアーツ」などに演劇評論を執筆している。名古屋市在住。また、2001年11月にシアターコクーンで上演した『RASHOMON』（野村萬斎演出・主演）の脚本を担当したほか、プロデューサーとして、愛知県文化振興事業団主催公演『こととことば』（構成・演出も）、『ひそやかな家』、ウィル愛知主催公演『ハロルドとモード』、名古屋市文化振興事業団主催公演『狂言—今日・幻・在の昔ばなし』、KUDAN Project 公演『百人芝居◎真夜中の弥次さん喜多さん』など、プロデュースも多数行っている。2005年～08年、静岡文化芸術大学非常勤講師、08年～東海学園大学非常勤講師。名古屋市在住。

著書 『青空と迷宮—戯曲の中の北村想』（小学館スクエア）『映画は何でも知っている』（窓社）。

受賞のことば

このたびは名誉ある「和辻哲郎文化賞」をお与えいただきまして、本当に有難うございました。望外の喜びであり、心から御礼申し上げます。演劇評論の仕事をしています私が、非力も顧みずに専門外のこのような本を書くことになりましたのは、一重に前田卓という女性の魅力に突き動かされてのことです。夏目漱石の『草枕』のヒロインのモデルとして、ともすれば「奇矯な振る舞いをする女」とされてきた彼女の中に、私は近代人というよりは現代人の感受性を感じました。「女性も人間である」という思いをごく当たり前に持っていた人と思えたのです。そしてその卓の在りようが、やはり現代的感受性の持ち主だった漱石と感応し、『草枕』を生み出すきっかけになったのだろうと思いました。それにしましても漱石の晩年に卓は漱石山房を何度か訪れているのですが、和辻先生も同じ頃山房に出入りしていた事実があります。もしかして二人は顔を合わせたり、すれ違ったりしたかもしれません。そんなご縁も思うにつけ、この本を書いて本当に良かったと、喜びをかみしめている次第です。

《選考委員評》

梅原 猛

今回の候補作のなかで劉岸偉氏の『周作人伝—ある知日派文人の精神史』と安住恭子氏の『「草枕」の那美と辛亥革命』が傑出していることは審査員一同、同意見であった。

周作人は魯迅の弟であるが、現代の中国では魯迅ほどには評価されていないであろう。この『周作人伝』を読んで私は、周作人こそまさに東西文化に対する深い教養をもち、激動の中国において悠然と生きた巨人であると感じざるを得なかった。

この書は、周作人に関するあらゆる文献を精読したうえで周作人というこの巨人の人生に肉迫したものであるが、その視点は公平である。白楽天をはじめとする中国のすぐれた

文化人の多くは流刑にあってはいるが、周作人もまた、中国を不法に占領した日本に対する協力ゆえに、漢奸として国民政府により懲役刑を受けた。そして現代の中国共産党政府によって解放されたが、以後、ギリシャの古典を中国語訳したり、日本の『平家物語』や滑稽本なども訳したりした人物である。

周作人は間違いなく「大人」であるが、まことに重厚なこの周作人伝を書いた若い劉氏にも、私は「大人」の風格を感じざるを得なかった。

和辻哲郎文化賞〔一般部門〕の受賞作はふつう一作であるが、『周作人伝』が受賞作に決定した後、さらに熱い討論が行われ、『「草枕」の那美と辛亥革命』が落とすには惜しい作品とされ、今回は姫路市の了承を得て異例の二作同時受賞となった。

「草枕」は夏目漱石の数ある小説のなかでも異色の作品で、「草枕」が真正面から論じられた漱石論は少ない。漱石にはこの「草枕」や「倫敦塔」のような作品を書くロマン的な詩人の面影が十分あると思われるが、それが「吾輩は猫である」「坊っちゃん」のような深い思想をもつ滑稽小説や「それから」「明暗」の如き深刻な小説とどのように関わるのかはよく分からなかった。

「草枕」の特徴は、自然描写の鮮やかさとともに、謎の女性、那美をはじめとする一風変わった登場人物が魅力的に描かれていることであろう。私は、漱石は那美に恋をしているのではないかと思ったが、この那美のモデルが誰であるか、そして彼女がどのような人生を送ったのか、まったく知らなかった。安住氏は那美のモデルは前田卓であるとし、その卓の人生を執念深く追跡する。

卓の父、前田案山子は大地主で自由民権運動の闘士になり、その運動のために全財産を使い果たしたとあってよい。そして卓の妹、槌の夫は宮崎滔天であり、滔天の主張は大アジア主義で、彼は辛亥革命を起こした孫文の最大の支援者であった。辛亥革命は中国の文明開化の第一歩であるが、それは滔天をはじめとする日本人の支援者がいなかったならば成功不可能であったのではないかと思われる。

卓もまたこのような運動に参加し、晩年貧窮生活を送ったものの、誇り高く生涯を終えたようである。安住氏の著書は、このような波瀾に満ちた卓の人生を粘り強く追いかけた甚だ興味深い作品である。

戦後ずっと続いていた日中の親善関係が壊れかけている現在、文豪、漱石のほのかなる愛人でありながら中国の近代化運動に命を賭けた女性が存在したことを中国人に知ってもらいたいものである。

受賞作二点はともに今後の日中の友好親善に寄与する書物ではないかと私は思う。

山折哲雄

昨秋、一〇月下旬に中国の武漢に行ってきた。ちょうど尖閣問題をめぐって反日暴動が吹き荒れ、日中間に緊張が一気に高まった時期である。だが、武漢は静かだった。私が訪れたのはその地にある華中師範大学で話をするためだったが、この文系のマンモス大学では日本語の授業をとる学生が三〇〇名をこえるといっていた。その集まった学生たちにむかって学長が、このような時期だからこそ文化の日中交流が重要であると情熱を傾けて語

りかけていたのが、つよく印象にのこった。

武漢は清朝を倒した辛亥革命（一九一一年）の発生地であり、その百周年を祝ったばかりの時期にあっていた。私は堅牢なつくりの記念館を訪れ、当時の革命成る、の熱気を肌身に感じて帰国したのであるが、その直後に和辻哲郎文化賞の選考にあたることになった。たんなる偶然だったのか、最後にのこった二作品が驚くべきことにいずれも辛亥革命にかかわった人物をテーマにするものだった。

一人は中国人、もう一人が日本人だったのも奇しき因縁である。前者が劉岸偉氏の『周作人伝—ある知日派文人の精神史』、後者が安住恭子氏の『「草枕」の那美と辛亥革命』である。

周作人は、その兄魯迅とともに日本と中国のあいだを往来し、作家として、翻訳者、批評家として実り豊かな仕事をのこした知識人である。若き日の日本留学時代に「大逆事件」に際会し、晩年には文化大革命に巻き込まれ、対日協力者として悲惨な最期をとげる。著者はその明暗きわ立つ人生の軌跡を克明に追い、のこされた膨大な作品を冷静緻密に読み解き、その人間像を多面的に浮き彫りにしている。辛亥革命後の動乱のなかで、政治的立場を異にする兄魯迅との仲がしだいに引き裂かれていくプロセスを明らかにしている点も興味をひく。それにしても、その悠揚迫らぬ堂々たる日本語の文章には敬服のほかはなかった。

一方の『草枕』の主人公「那美さん」は、漱石文学に親しんだ者ならば誰知らぬものもない名前であろう。そのモデルが熊本時代の漱石がたまたま出会った前田卓^{つな}であり、著者はその魅力的な身元を探索するとともに、彼女の人間的な振舞いが名作『草枕』のなかにどのように活かされ表現されているかを、わかりやすい達意の文章で浮かび上げさせている。さらに筆を転じ、この前田卓の実妹が宮崎滔天の妻であった事実を手がかりに、二人が自由民権運動のしぶきを浴びつつ、来日していた中国の若き革命家たちといかに付き合い、そして支援の手をさしのべようとしていたか、その起伏に富む人生を生き生きと描いていく。「那美さん」の背後に隠されているもう一つの意外な素顔が、辛亥革命を鏡としてあぶり出されているのであって、その手さばきと工夫がまことに心憎い。

最後に、右の二作とも巻末近く、心に沁みわたる哀感とともにそれぞれの人生の断面を点描していることにもふれておかなければなるまい。

周作人は、文化大革命の昂揚期到北京の自宅に逼塞していたが、やがて紅衛兵に襲われ、離れの小屋に追いやられてしまう。誰にも看取られることなく、八十二歳でこの世を去るのであるが、その直前まで『平家物語』の翻訳にとりくみ、第七巻までの原稿を仕上げていた。その最後の現場に、紅衛兵が乱入したのだった。

一方、熊本から東京にもどったあとの漱石はどうだったのか。著者によれば、漱石はのちに再会することになる前田卓との逢瀬をひそかに楽しみにしていたのではないかと、という。熊本時代の漱石は鏡子夫人との新婚生活をはじめたばかりだったが、そこに「新しい女」の前田卓があらわれた。そしてそのころ、鏡子夫人は身心の不調に悩まされていた。そのことに着目して、もしかすると三者のあいだには愛をめぐる緊張と葛藤が存在していたのではないかと、三角関係を匂わせているのである。

劉岸偉〈周作人〉を今あらたに

すばらしい著作である。選考の後もところどころ読み返し、感銘をあらたにしている。

周作人について、私は、魯迅の弟で大変な親日家であったことくらい、あまり多くを知らなかったが、本書により一人の優れた知識人の存在をあらたに親しく教えられたと思う。

周作人は若くして日本に留学、日本文化についての理解は真実舌を巻くほどだ。本書はそれがどのように培われ、どれほど広く、どれほど深かったか、さまざまな資料やエピソードを交えながら入念に伝えている。なによりも明解な筆致で読みやすい。引用の巧みさも特筆すべきことだろう。なんの違和感もなく、五百ページの大作がスラスラ読めてしまう。そのみごときは、劉氏が異国の筆者であることを考え、

　　どういう才能だろう

と訝ってしまうほどだ。

思えば周作人の生きた時代は内外の波乱にこと欠かない。日中関係において、中国の情況において、昨日の友は今日の敵、親交、裏切り、政情の変転、弾圧、知識人にとっては辛いことが多かったろうが、それを真摯に体験した周作人、それを入念に綴った本書の著者、前者のすばらしさが後者によって今、みごと明らかにされたと評して過言ではあるまい。

周作人は、日本文学の理解者として、また紹介者として多くの功績を残しているが……そしてその論述は一級品と認められているが、広くヨーロッパの文芸についても見識が深く、古代ギリシアについては……同じように古く、優れた内容を持つ中国の古代文明がなぜしなやかに現代に生きていないか、この比較など、本書では多言を弄してはいないが、鋭く確かに紹介している。

もちろん周作人は、故国についての理解も愛情も深かった。それだけに晩年の政治的迫害は傷ましい。このあたりの叙述も本書はつきつきしい。

昨今の中国を見て日本人の中に

「中国人なんて、ろくなもんじゃないな」

と、そんな風評をきかないでもないが、今こんなすてきな中国人のあったことを本賞によって訴えることができれば本懐である。

安住恭子〈『草枕』の那美と辛亥革命〉の文学性

夏目漱石の著作の中で『草枕』は必ずしも評判のめざましいものではない。一編の小説として弱点も目立つ。しかし漱石の文学や芸術についての根源的な思考を探るためには随所に見えてくるものを持つ作品でもある。

〈『草枕』の那美と辛亥革命〉は、『草枕』のヒロイン那美にモデルがあったこと、そのモデル前田卓がどんな人であり、どんな生涯をたどり、漱石とどう関わったかを、少ない手がかりをたどりながら追究して、漱石の文学の要所に、また前田卓の妹が宮崎滔天の妻であったことから孫文など中国の革命家との交流などにも筆をのばしている。資産家の娘に生まれながら最後はスッテンテンにまで落ち込んだ女傑の人生をたどって間然すると

ころがない。

とにかく前田卓という女性がおもしろい。三度も結婚に失敗していることをおもしろがってはなるまいが、幼いときからユニークで、少し長じては女性の自立を強く主張するなど波乱の生涯を生きた人らしい。

前田卓が那美のモデルであったとは、漱石研究者のおおよそが知るエピソードだが、もちろん作中のヒロインと卓とは異なっている。漱石が卓となぜ出会い、なにを感じ、それを『草枕』の中にどう描いたか、いくつかの論証と推測が、漱石の創作法にまで広がっているところが本書の特徴であり白眉でもある。

まったくの話、作中人物とモデルとの関わりは悩ましい。ほとんどそのまま、密接な関係を持つケースもあるが、モデルがインスピレーションを与えただけ、実像とは相当にかけ離れているケースも多い。

那美と卓の場合は漱石がインスピレーションを受けただけというケースに近いが、そのインスピレーションは強く、作品のキイとなった、と見る著者の視線は十分に説得力があり、漱石の創作法、ひいては作家の創作法を考えるうえで役立つ。本書がユニークな女性の伝記としてだけでなく、文学研究にまで広がっているところを多としたい。そして、もう一つ、読みやすさも長所の一つである。本は万人の理解に適うものでありたい。